

新しい留学生向け総合教科書作成のための 予備的考察

—— 初級文法項目を中心に ——

庵 功 雄

1. はじめに

現在、留学生日本語教育はたいへん厳しい状況に置かれている。

民間の日本語学校はベトナムやネパールなどからの留学生が急増し⁽¹⁾、一見、活況を呈しているようであるが、実際は、そこには日本の「移民」政策の矛盾を補完するような意味合いも存在している。例えば、日本で留学生に認められている週28時間の労働時間は国際的に見てもかなり長い（志甫 2015）⁽²⁾、それをさらに週36時間に延長しようとする動きすら存在する⁽³⁾。こうなると、もはや「留学」が目的ではなく、移民受け入れを実行するための（いびつな）抜け道と言われても仕方がないのではなかろうか。

また、大学の留学生教育でも次節で述べるような問題が顕在化してきており、どちらから見ても、留学生日本語教育は社会的に厳しい状況にあると言わざるを得ない。本稿では、そうした問題意識のもと、大学における留学生日本語教育を対象に、筆者たちの研究グループが作成に着手しつつある新しい留学生向け総合日本語教科書について、その骨組みとなる文法シラバスを、特に初級に焦点を当てて紹介する。

2. 留学生センターの留学生日本語教育を取り巻く環境の変化⁽⁴⁾

前節で述べたように、本稿では、「留学生センター」⁽⁵⁾における留学生日本語教育（以下、日本語教育）について考えるが、「留学生センター」を取り巻く環境にも大きな変化が起こっている。

2. 1 学習者層の変化

第一の変化は学習者の変化である。

「留学生センター」はその設立の趣旨からも、教育の対象は、日本語で専門教育を受け、日本語を用いた職業に就くことを目指す学生（野田尚史氏の言う「日本語エリート」）であるはずだった。ところが、日本経済の低迷にともない、そうした学生は多数派ではなくなってきている。

2. 2 英語シフト

第二の変化は大学の留学生獲得戦略にある。

大学の評価（ランキング）を高めるという名目で、有名大学は英語でのプログラムの充実を留学生獲得戦略の柱に据えつつあり、文部科学省の政策もその方向性を持っている。また、日本人学生の送り出しの代替として、海外の協定校を増やす動きも強まっており、そこからの交流学生が大学における留学生の多数派を占めつつある。

こうした流れの中で、留学生教育を日本語で行っていたのでは優秀な人材は集まらないので、英語で学位が取れるといった形で留学生教育は英語で行うべきだという「英語シフト」の流れが有力大学を中心に強まってきている。

2. 3 AI 化の進展

以上の2点は既に顕在化している変化であるが、今後急速に影響を強めていくと思われるのが、AI（人工知能）化の進展である。Frey & Osborne (2013) などで指摘されているように、AI 化（コンピューター化）によって、これまで人間が行っていた職業から人間が不要になることが予想されている。例えば、タクシーの運転手はその例である⁽⁶⁾。Frey & Osborne (2013) のコンピューター化可能な職業のリストの中には“teacher”や“instructor”も含まれている。また、今井（2015）によれば、アメリカの初等中等教育では、完全自律型 e-learning システムが語学教師に取って代わる事例が見られるようになってきているという。

3. 文法シラバスの見直しの必要性

前節で指摘した留学生センターを取り巻く状況の変化の結果、「留学生センター」の日本語教育も深刻な課題に直面しつつある。すなわち、教員の定員の（実質的

な) 削減やそれにとまなう業務負担の増加である。これらは国立大学における文系(特に人文系)の学部・学科削減圧力の一環でもあり⁽⁷⁾, 既に英語以外の第二外国語教育はこれによって深刻な危機に見舞われているが, 今後同様の圧力が留学生センターにかかってくることは確実であり, 既に一部にはそうした動きも見られる。

このように外的状況が変わっていく中で, 日本語教育がこれまでの方法論を墨守すれば, 以下で述べる通り, その変化に飲み込まれていくのは自明であると筆者は考える。

したがって, 今必要なのは, そうした外的状況の変化に対応して, 日本語教育が変わっていくことである。本稿の第一の目的は, このことを文法シラバスを中心に考えることにある。

3. 1 現行の初級文法シラバスの問題点

現行の文法シラバスには次のような特徴があるとされる(小林 2009)。

- (1) a. シンタクスに関わる部分は初級で終わる(「文法は初級で終わり」)
- b. 中級以上では複合辞が中心になる

現行の文法シラバスが持つこうした特徴は, 端的に言えば, 「文法は初級で終わり」ということである。これは, 現行の文法シラバスが作られた当初においては妥当なものであったと考えられるが, 現状では次のような問題点がある。

- (2) a. 不必要な項目が多すぎる問題
- b. 必要な項目が十分に引き上げられていない問題

3. 1. 1 不要な項目が多すぎる問題

(2a) について言えば, 例えば, 現行の初級教科書では, 概言(寺村 1984)を表す形式として, 「と思います」と「でしょう」がともに引き上げられているが, 推量の意味の「でしょう。」は天気予報以外ではほとんど使われないだけでなく, 次のような「カチンとくる」誤用(野田尚史氏)を生みかねないという点で, 初級で導入してはいけない項目であると言える(庵 2009a)。

- (3) (指導教員が推薦状の締切を問い合わせたメールへの返信)

締切は金曜日です。水曜日までにいただければいい {?? でしょう/ok
と思います}。(原文は「でしょう」)

これ以外にも, 現行の初級シラバスには理解レベルの項目が数多く含まれており, 産出レベルに絞って考えれば, 大幅に項目を削減できる(理解レベルと産出レベル

については庵 2017 を参照)。

3. 1. 2 必要な項目が十分に引き上げられていない問題

一方、(2b)に関する問題点としては次のようなものが挙げられる。

例えば、現行の初級シラバスでは、「自他の対応」を「ている」と「である」の使い分けと対応させて導入しているが、両者の間には定量的に見ても相関はほとんどなく(中俣 2011)、かつ、理論的に考えても因果関係はないと言える(益岡 1987)。そして、このようにしか「自他」を扱わないことが学習者が自他を使いこなせない大きな原因になっていると考えられる(庵 2013)。

同様の問題は、受身、使役、ている／ていた、「は」と「が」などについても存在する。

3. 2 現行の中・上級文法シラバスの問題点

一方、現行の中・上級シラバスの問題点は、このレベルに真の意味で「文法」と呼べる項目がほとんどないということである。

3. 1 で見たように、現行の初級シラバスの問題点は理解レベルと産出レベルの混同にあると言えるが、中・上級シラバスの最大の問題点は産出レベルの項目がほとんど存在しないという点にある。

現在、中・上級で「文法」と言えば、日本語能力試験 N1, N2 の試験対策が想定されるのが普通だが、それらの項目の大部分は複合格助詞か、二次的なモダリティ形式であり、産出レベルと言えるのは「について、のに」などごく一部で、残りの項目は理解レベルであるので、その意味がわかれば十分であり、他の形式との使い分けの練習(これは産出レベルのもの)は不要である⁽⁸⁾。

4. 「想の表現形式」としての文と文法シラバス

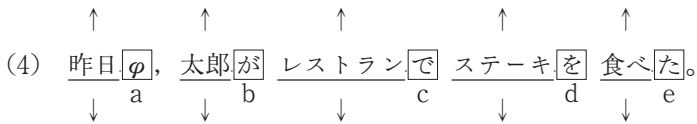
本節では、前節までの問題意識を受け、新しい文法シラバスが満たすべき要件について考えるが⁽⁹⁾、最初に、産出のための文法(庵 2017)の観点から見た場合「文」とは何かについて考え、それとの関連で文法シラバスについて考える。

4. 1 思考内容の表現手段としての文——統合的關係と範列的關係——

文を思考内容を表現するための手段と考えた場合、ソシュールの言う統合的關係

(syntagmatic relation) と範列的關係 (paradigmatic relation) の組み合わせが重要になる (統合的關係と範列的關係については仁田 1997 も参照)。

例えば, (4) は「発話時を含む 1 日の前日 (a) に, 太郎という人物 (b) が, レストランという場所 (c) で, ステーキという対象 (d) に対して, それを口に入れて消化するという行為を実行した (e)」という内容を表しており, これらは統合的關係 (「横の關係」) を構成する。一方, 「昨日, 太郎, レストラン, ステーキ, 食べ (る)」は潜在的に存在する選択肢の中から選ばれたものであり, これらは範列的關係 (「縦の關係」) を構成する。



この両者の關係は, たとえて言う, 統合的關係 (□で囲んだもの) はゼリーやクッキーなどの「型」に当たり, 範列的關係 (下線部のもの) は「材料」に当たる。「型」によって, ゼリーなどがどのような形になるかが決まり, 「材料」によって, それがどのような色や味になるかが決まるように, 文も, この両者の組み合わせ方によって, 様々な内容を表出することができる。これが「言語は無限の表現性を持つ」ということの意味であると考えられる。

こうした「型」を言語教育の観点からとらえたものが「文型」である。庵 (2017 近刊 a) で指摘したように, 林 (1960 = 2013) はこうした点を極めて早い時期に指摘した文献であり, 国語教育だけでなく, 日本語教育においてもその含意するところは大きい。

4. 2 「拡張版ミニマムの文法」としての初級文法シラバス

庵 (2015a) は, こうした文型観をもとに, 南 (1974), 仁田 (1995) で規定されている階層構造にしたがって, 「1 機能 1 形式」を原則に初級シラバスを作成したものである ((5)(6) の各文法カテゴリーの下の形式は例)。これは, 庵 (2009b, 2014) など, 地域型日本語教育のための初級 (地域型初級) 用に設計した「ミニマムの文法」⁽¹⁰⁾を学校型日本語教育のために修正したものである (この点について詳しくは庵 2015a 参照)。

- | | | | | | | |
|-------|----|-----|-------|----|-----|----------|
| (5) 格 | 語幹 | ボイス | アスペクト | 肯否 | テンス | 対事的モダリティ |
| | | てもら | てい | ない | た | と思う |

- #### 4.3 中・上級文法シラバスとコードの精密化

このことを「条件節」を例に説明すると次のようになる。

- こうした導入の仕方をするのは、一義的には産出のための文法という側面を重視するためであるが、「条件」を表す形式の実際の分布の違いを踏まえたものでもある（庵 2017）。すなわち、実例の分布において、「なら」は接続の仕方において「たら、ば、と」と大きく異なる。また、「たら」と「ば」の中心的な違いは話しことばと書きことばという文体差にある（これ以外に、「たら」と「ば」における方言差の問題などもある（庵 2012 参照））。さらに、「仮定条件」（恒常条件を除く）で「と」が使われるのは基本的に否定形が前接する場合である（宮部 2017）。こうした要因を全て考慮すると、(7) の導入順が妥当であるという結論となる。

(5)(6) で取り上げた各文法カテゴリー（これらの全体が可能な「型」を規定する）について、こうしたコードの精密化が行われた結果が林（1960 = 2013）が取り上げているような「基本文型」の総体、すなわち、日本語を用いて表現可能な

「想」の「型」の総体になるのである。

5. 新しい初級文法シラバス（修正版）の提案

4では文法シラバスがどのような条件を満たすべきかについて、初級と中・上級に分けて考察した。本稿ではこのうち初級について考察するが、本節では、これについて、庵（2015a）からの修正点を中心に述べることにする。

5.1 言語習得観の転換の必要性

第一に考えるべきことは、（特に初級に関する）「習得」についての考え方の見直しである。

現行の考え方では、「初級」では「文型」の数を増やすことが「習得」だと考えられている。そのため、直接法では語彙をコントロールして教えることが当然視されている。

確かに、この方法は、「学習者の最終的な習得目標が上級である場合」には有効であると言える。それは、この方法をとった場合、たとえ最初の半年（実際は4ヶ月）修了時に表現できる内容が「小学校中学年レベル」であったとしても、次の半年後には中学生レベル、その次の半年で高校生レベル、最後の半年修了時に大学生レベルになればよく、その途中経過は問題にならないからである（この習得の仕方は基本的に母語話者が日本語を習得するのと同じ段階を踏んでいると言える）。

しかし、2.1で見たように、現在「留学生センター」で学んでいる学生の多数派は、そうした上級を目指す学習者（「日本語エリート」）ではない。そうであるとすると、半年後の到達レベルが「小学校中学年レベル」というのは、彼／彼女たちの動機付けを著しく下げると言わざるを得ず、現状の形を続けた場合、真の意味で日本語学習を続けようとする学習者層を増やすことはできない。そして、その数を増やすことができれば、少なくとも、日本国内の日本語教育機関である「留学生センター」は、早晚2節で指摘したような様々な「外圧」に抗しきれず、縮小を余儀なくされることになる可能性が高い。

そして、このことは、単に日本語教育のポストが減らされるということに留まらない。大学のポストが減らされることは大学院で日本語関係の博士学位を取った人が事実上職に就けなくなることを意味する。「恒産なくして恒心なし」という孟子のことばを引くまでもなく、これは、日本語学／日本語教育学といった学問がその

存立基盤を失うということである。こうした観点に立って、われわれは「留学生センター」に学びに来る学生の「有効需要」を作り出していく必要があるのである。

そうした観点から考えると、上で取り上げた現行の方法論を根本的に見直す必要があることがわかる。具体的には、「文型」を思考内容を表出するために必要な最小限のものに絞り、それを確実に使えるようにし、語彙には制限をかけずに学習者が述べたい内容を自由に述べさせることを目指すのがよいと考えられる。以上を図示すると、次のようになる。

(表1) 初級に関する新しいとらえ方

	これまで	これから
文型	変数（どんどん増やす）	定数（あまり増やさない）
語彙	定数（あまり増やさない）	変数（制限をかけない）

例えば、「AはBです。」という文型にしても、(8a)として導入してそれで終わりと考えるか、(8b)のようにとらえるかではその後の発展可能性が全く異ってくる。

- (8) a. 私^はマイク・ミラー^{です}。(『みんなの日本語・初級1』)
b. 日本経済の課題^は財政再建^{です}。

この場合、(8b)のAやBの位置に入る語は予め導入することはできない。このように「初級」に関する考え方を転換した場合、教師の役割も変化するが、これについては7節で述べる。

5.2 本稿における修正点(1)——複文のとらえ方——

上述のように、筆者は庵(2015a)において既に、新しい留学生教育(学校型日本語教育)にそくした初級シラバスを提案しているが、その後の考察の結果、いくつかの点において、その意図をより徹底させることが必要、かつ、重要であると考えるに至った。ここからの3つの小節では、この点についての筆者の見解を述べることにする。

第一の修正点は、複文のとらえ方についてである。

庵(2015a)では庵(2009b, 2014)の考え方を受け継いで、複文をStep2から導入することとした。しかし、次のように、接続助詞ではなく接続詞を使えば、複文で述べる内容の大部分はStep1レベルでも述べることができる⁽¹²⁾。

- (9) a. 昨日は頭が痛かったので、学校を休みました。(Step2レベル)

b. 昨日は頭が痛かったです。それで、学校を休みました。(Step 1 レベル)
同様の関係は、「～てから→それから」「～けど→でも」「～とき→そのとき」などでも可能であるが、「～て」と「～たら」では不可能である。

(10) a. 昨日は早めにお風呂に入って、寝ました。

b. ?昨日は早めにお風呂に入りました。そして、寝ました。

(11) a. 明日雨が降らなかったら、ハイキングに行きます。

b. *明日は雨が降りません。そうしたら、ハイキングに行きます。

(11a) を (11b) に言い換えることが完全に不適切である⁽¹³⁾のに対し、(10a) を (10b) に言い換えることは一見可能であるように見える。しかし、石黒 (2000) が指摘するように、こうした言い換えは稚拙さを感じさせるものであり、不適切である。

なお、(9b) のように、接続詞を使って大部分の複文相当表現を Step 1 レベルから導入したとしても、Step 2 レベルの複文形式にはコードの精密化を経たものとしての存在意義がある。

5. 3 本稿における修正点 (2) ——受身——

本稿における第二の修正点は受身に関するものである。

庵 (2009b) などにおいて筆者は、受身を初級で導入することに否定的であったが、菊地・増田 (2009) に接し、2014 年度の日本語教育学会春季大会におけるシンポジウム「受身の教え方」での共同作業を通して、こうした認識を改めた。

本稿では、受身のうち、動作の受け手が「私 (たち)」である場合については、「私 (たち)」を主語とする自動詞相当文と考え、これを Step 2 レベルに加えることとする。

(12) a. 昨日、学校で先生にほめられました。

b. 電車の中で足を踏まれました。

なお、(13b) のような対象に対する共感度 (degree of Empathy) の違いによって能動文と受動文が使い分けられるタイプの受身 (久野 1978) や、(14)(15) のようにものを主語とする受身は Step 3 以上のレベルの表現と考える。

(13) a. ネコがネズミを追いかけている。

b. ネズミがネコに追いかけられている。

(14) 新しいお菓子が発売された。

(15) 調査結果が公表された。

5. 4 本稿における修正点 (3) —— 「は」と「が」の扱い方——

本稿における第三の修正点は「は」と「が」の扱い方についてである。

庵 (2016) では、「は」と「が」の使い分けについての新しいとらえ方を提示し、庵 (2018 予定) ではそれをさらに単純化したモデルを提示している。しかし、これらのうち、複文形式に関するものは、名詞修飾節を含む複文が導入されるまでは実質的には使えない。したがって、Step 1 においては、単文についての「は」と「が」の使い分けを考える必要がある。

単文について考える場合、重要なポイントがある。

(表 2) 品詞とテンス (Step 1 レベル)

	過去	現在	未来	恒時
動詞	○	×	○	○
形容詞 ⁽¹⁴⁾	○	○	○	○
名詞+だ	○	○	○	○

(表 2) は Step 1 レベルにおける品詞とテンスの関係を表したものである。この表からわかるように、テ形が存在しない Step 1 レベルであっても動詞 (状態動詞を除く) の現在以外の全てのテンスを表すことができる。ここで、テンスは文法カテゴリーであり、全ての文はテンスを持つので、全ての単文のうち、述語のテンスが動詞の現在であるもの以外は Step 1 レベルで既に表すことができる。ここで、通常の文脈では、1 人称を主語とする単文でテイル形が述語となることはない (cf. 田窪 1993)。例えば、(16) が文法的なのは、電話で話しているなど、聞き手に話し手が見えない位置にいる場合に限られる。

(16) 私は今自分の部屋で本を読んでいます。

そうだとすると、(表 2) の「×」の部分は教室活動において重要なものであるとは言えず、Step 2 レベルに回してもほとんど問題は生じないと考えられる。

なお、これに関して「住んでいる、持っている、働いている」などは教室活動において必要であると思われるかもしれない。しかし、これらは庵・清水 (2016) の分け方と言う典型的な「変化動詞」でも「非変化動詞」でもない。したがって、これらは生産的にマス形 (または、辞書形) から導入すべきものではなく、テイル形で使われる動詞として扱うことが、結果残存のテイル形の適切な導入などのためにも必要である (テイル形の扱いに関する議論については山内 2015 も参照)。

以上のように考えれば、Step 1 レベルにおいて既にほとんどの単文表現、および、

複文相当表現のかなりの部分を産出することができることがわかる。このことから、産出のための文法という観点に立てば、非常に少ない文型で、非常に多くの内容を述べられることがわかるのである。

6. 新しい留学生向け日本語総合教科書作成に向けて

ここまで、新しい文法シラバスの必要性とその内容について論じてきた。ここでは、その議論を受けて、われわれの研究グループで作成しようとしている新しい留学生向け日本語総合教科書について簡単に述べておきたい。

この教科書の最大の特徴は、初級から上級まで一貫した文法シラバスに沿って作られているということである。その上で、それぞれのレベル（Step）において、「文法」「読解」「会話・聴解」「作文」それぞれの技能について、そのレベルで使いこなせる文法形式、談話形式を用いて、学習者自身の思考内容（想）を伝えたり、日本語を用いて情報を得たりする活動を行うことを目指している。

6. 1 新しい留学生向け日本語総合教科書作成の必要性

まず、そうした教科書が必要である理由をいくつか挙げる。

第一の理由は、学習者に具体的なゴールを示すことで、日本語学習を始める時点における学習者の動機付けを高めるということである。これまで述べてきたように、現在の「留学生センター」における学習者の中心は、日本語学習の動機付けが高いとは限らない「交流学生」であり、そうした層に日本語学習に対する動機付けを与えるためには、簡単な文型で複雑な内容を述べるができることを伝えて、日本語は難しくないという「ゴール」を学習者に実感させることが極めて重要である。そのためには、文法シラバスについて現存する様々な「しがらみ」を捨て去り、新しい文法シラバスにもとづく新しい日本語教科書を作る必要がある。

第二に、日本語学習の動機付けがあまり高くない学習者を対象とするとしても、その学習者を対象とする初級教科書は「サバイバルジャパニーズ」であってはならないということである。サバイバルジャパニーズというのは、ある特定の目的の遂行に特化したものであるが、そうした教科書は仮にその目的が達成できたとしても、その後のレベルの学習につながることはなく、結果として日本語教育の専門性を主張することはできず、例えば、初級の日本語教育は学外の機関にアウトソーシングした方が安価だといった方針が大学側から提示されたときに無力である。

6. 2 日本語教育の安定的需要の創出のために

第三の理由は、海外における日本語教育との関連である。

本稿では、「留学生センター」における主な学習者が「日本語エリート」ではなくなっているということを述べてきた。その理由の1つは交流学生の増加であるが、もう1つの理由は日本語を使ったキャリアを目指す学習者の減少である。後者の原因は日本経済が魅力を失っていることにあり、現在の状況が回復することは（当面）期待できない。

しかし、アニメなどを中心とする日本のサブカルチャーの人気は不動のものがあり、それを入口として日本語学習に入ってくる学習者数は減少しておらず、今後も不変であることが期待できる。そうであるとすれば、この層のたとえ1割でも本格的な日本語学習に引きつけることができれば、日本への留学者数は飛躍的に増加し、「留学生センター」を取り巻く状況に大きな展望が開けることになる。その意味でも、本稿で主張しているような教科書は必要なのである。

7. おわりに

本稿ではまず、日本語教育を取り巻く現状を概観し、「留学生センター」が今後存立の危機に見舞われる可能性が高いこと、そして、そのことは日本語学／日本語教育学という研究分野の存立に関わる可能性が高いことを述べた。

それを受けて、それに対する対抗策として、現在の日本語教育の方法論を根本的に見直すことが必要であり、その具体的な手段として、文法シラバスを見直すことが必要であることを主張した。その上で、そうした見直しにとって必要な考え方、および、具体的な提案を行った。最後に、そうした新しい文法シラバスに基づく新しい留学生向け総合日本語教科書作成の必要性について述べた。

本稿を閉じるにあたって、2. 3で述べたAI化の進展と新しい教科書の関係について少し私見を述べておきたい。

AI化（コンピューター化）と人間がどのように付き合っていくかは、（日本語）教育だけでなく、ありとあらゆる分野において今後問題となっていくものと思われる。単純にAI化は人間の職を奪うものだと考えるのは、社会の変化の流れから考えて、不適切、かつ、変化の方向性を止めることはできないという点で無効である。必要なのは、そうした現実に対応できる現実的な枠組みを策定していくことであると思われる。

その意味で、「コンピューターにできることはコンピューターに任せて、人間は人間にしかできないことをやればいい」というのが適切な態度であろう。ここで問題になるのは、これからは、一人一人の教師が授業の場で「人間にしかできないこと」をやっているか否かで評価され、その評価に適合できなければ、職を失うことになるということである。これは絵空事ではなく、2.3で指摘したように、既にそうした動きは出て来ているのである。

5.1で、初級に関する考え方を根本的に見直す必要があることを指摘し、それを行った場合に教師に求められる能力が現在のものから大きく変わることを示唆した。後者について私見を述べると、次のようになる。

5.1で述べたような形で新しく初級を考えた場合、語彙をコントロールすることはできないため、学習者からどのような文が出てくるかを事前に予測することは事実上不可能になる。そのようにして学習者から出てきた文には様々なレベルの不適切さが存在するはずだが、教師はそうした不適切さを選別し、そのレベルにあった適切なフィードバックを学習者に与える必要がある。教師がそうしたフィードバックを適切に与えられれば、それは学習者の学習を促進する「理解可能なインプット」(Krashen 1985)につながる可能性が高い。なぜなら、学習者が産出したものは「練習のための練習」の結果ではなく、自らの思想内容(想)を日本語で表現したものであり、真正な(authentic)ものであるからである(真正さの重要性については庵 2017を参照されたい)。

これは言わば、これからの教師には、野球のキャッチャーの立場になって、学習者(ピッチャー)が「どんな球を投げてきても受け止める」ということを学習者に示せる能力が求められるようになるということである。教師がこうした能力を身につけ、それにもとづく授業を行えば、それはコンピューターには実行不可能な内容になり、日本語教育の専門性を主張することが可能になり、「留学生センター」のポストを守る上で重要な基盤となる。もちろん、ポストの削減は日本の文教行政全体の流れに関わることであり、このことが実現すれば必ずポストが守れるとは言えない。すなわち、このことはポストを守るための十分条件ではない。しかし、必要条件であることは間違いない。

日本語教育はこれまで、日本経済という「虎」の威を借りた「狐」であり、自らの手で学習者を獲得する必要に迫られたことはなかった。しかし、その「虎」の威光が落ち、AI化(コンピューター化)という「黒船」がやってきている中、これまで通りのやり方を続けていくことは困難であるというのが筆者の考えである(こ

のことは庵 2013 ほか様々な機会を通して指摘してきたことでもある)。これまでの方法を墨守して、泥船といっしょに沈むか、新しい方法を作り出して、自らの手で日本語教育（学）を守るか、その決断をする必要にわれわれは迫られていると思われる。

謝辞

本稿は科研費 16K02804（研究代表者：太田陽子）、および、科研費 17H02350（研究代表者：庵功雄）の研究成果の一部である。

注

1. 2015 年度の国別在籍者数は、1 位中国、2 位ベトナム、3 位ネパールであるが、2011 年度と比べると、それぞれの在籍者数の変化は次の通りである。中国（17354 人→19190 人）、ベトナム（1046 人→18751 人）、ネパール（957 人→7559 人）（いずれも、左が 2011 年度、右が 2015 年度の在籍者数。出典：日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」）。
2. 先進国の多くが最大週 20 時間程度である。
3. 西日本新聞「留学生就労「週 36 時間」に 8 時間拡大、九州各県が特区検討」2017 年 2 月 24 日（https://www.nishinippon.co.jp/feature/new_immigration_age/article/310236/ 2017 年 6 月 16 日閲覧）。
4. 本節と次節の内容の一部は、庵（2017 近刊 b）の内容に基づく。
5. 現在、各大学の「留学生センター」は改組などによって名称変更が行われていることが多いが、本稿では、大学における日本語教育を所管する部局の意味で「留学生センター」という語を用いる。
6. クローズアップ現代「「仕事がない世界」がやってくる!？」（2016 年 3 月 15 日放送）などを参照（<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3782/index.html> 2017 年 6 月 17 日閲覧）。
7. これについては、日本語学会会長仁田義雄氏による意見文「文部科学省の通知について」も参照されたい（<https://www.jpling.gr.jp/notice/mext2015/> 2017 年 6 月 16 日閲覧）。
8. これに関しては少し補足が必要である。すなわち、中・上級レベルでは学習者が目指すレベルなどが一様ではないので、一律に理解レベル／産出レベルと仕分けをすることはできないという反論についてである。この反論はもちろん一般論としては正しい。ただし、例えば、「お礼かたがた」（旧日本語能力試験 1 級レベル）を「産出」できるように練習する時間があるのなら、以下の（ア）のような場合に「してください」と「させてください」が確実に選択できるように練習することの方が先であると考えられる。
（ア） 今度の会議の内容に興味があるので、会議に出席 {してください・させてください}。
9. 本節の内容のうち、文法シラバスに関する部分は庵（2015a, 2015b）の内容を踏まえ、

それを部分的に改訂するものである。なお、中・上級シラバスについては、庵（2015b）で用いたデータの精査が現在行われており、その結果を踏まえた考察が近く発表される予定である。

10. 詳しくは庵（2009b, 2014）などに譲るが、「ミニマムの文法」は、初級前半に相当する Step 1 と初級後半に相当する Step 2 に分かれ（地域型日本語教育において、両者にそれぞれ対応する教材として作成されたのが庵監修（2010, 2011）である）、Step 1 と Step 2 の分水嶺となるのはテ形である。この点についての詳しい議論については山内（2015）を参照されたい。
11. 中・上級シラバスは、Step 3～Step 6 に分かれ、それぞれ初中級（Step 3）、中級（Step 4）、中上級（Step 5）、上級前半（Step 6）となる（庵 2015b）。
12. (9a) を (9b) に言い換える手法は林（1973 = 2013）に見られる。庵（2007）はこの手法を一般化することによって、接続詞（三上の用語では承前詞）にはソ系統しか見られないという三上（1955）の観察の理由を説明している。なお、このタイプの言い換えは、野田（1989）の言う「真性モダリティを持たない文」においても見られる。
 - (イ) a. いつか空を飛んでみたいという希望から飛行機は生まれた。
 - b. いつか空を飛んでみたい。そういう希望から飛行機は生まれた。
 (イ b) の波線部が真性モダリティを持たない文だが、これは「文」の形式を持つものの実質的には従属節である。野田（2002）はこの点をとらえ、こうした要素を「子文」と呼んでいる。
13. ただし、同じ「たら」（「と」）でも事実的用法の場合は言い換えが可能である。
 - (ウ) a. 窓を開けたら、富士山が見えました。
 - b. 窓を開けました。そうしたら、富士山が見えました。
 - (エ) a. 夜になると、急に寒くなりました。
 - b. 夜になりました。すると、急に寒くなりました。
14. イ形容詞（形容詞）、ナ形容詞（形容動詞）の双方を含む。

参考文献

- 庵功雄（2007）『日本語研究叢書 21 日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 庵功雄（2009a）「推量の「でしょう」に関する一考察——日本語教育文法の視点から——」『日本語教育』142
- 庵功雄（2009b）「地域日本語教育と日本語教育文法：「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然研究』3, 一橋大学
- 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門（第2版）』スリーエーネットワーク
- 庵功雄（2013）『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄（2014）「「やさしい日本語」研究の現状と今後の課題」『一橋日本語教育研究』2, ココ出版
- 庵功雄（2015a）「日本語学的知見から見た初級シラバス」庵・山内編（2015）所収
- 庵功雄（2015b）「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵・山内編（2015）所収

- 庵功雄 (2016) 「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」 庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
- 庵功雄 (2017) 『一歩進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版
- 庵功雄 (2017 近刊 a) 「日本語教育から見た『基本文型の研究』」 庵功雄・石黒圭・丸山岳彦編『時間の流れと文章の組み立て——林言語学の再解釈——』ひつじ書房
- 庵功雄 (2017 近刊 b) 「大学における英語中心主義を生き延びるための留学生日本語教育と〈やさしい日本語〉」『言語文化教育研究』15
- 庵功雄 (2018 予定) 「「は」と「が」の新しいとらえ方についての一考察」『一橋日本語教育研究』6, ココ出版
- 庵功雄・清水佳子 (2016) 『上級日本語文法演習 時間を表す表現 (改訂版)』スリーエーネットワーク
- 庵功雄監修 (2010, 2011) 『日本語これだけ! 1, 2』ココ出版
- 庵功雄・山内博之編 (2015) 『現場に役立つ日本語教育研究 1 データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 石黒圭 (2000) 「「そして」を初級で導入すべきか」『言語文化』37, 一橋大学
- 今井新悟 (2015) 「大規模 e-learning 教育と日本語教育の未来」『ことばと文字』4, くろしお出版
- 菊地康人・増田真理子 (2009) 「初級文法教育の現状と課題」『日本語学』28-11
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 小林ミナ (2009) 「「基本的な文法項目」とは何か」 小林ミナ・日比谷潤子編『日本語教育の過去・現在・未来』凡人社
- 志浦啓 (2015) 「外国人留学生の受入れとアルバイトに関する近年の傾向について」『日本労働研究雑誌』57-9
- 田窪行則 (1993) 「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」 益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中俣尚己 (2011) 「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究」 森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 仁田義雄 (1995) 「日本語文法概説 (複文・連文編)」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 野田尚史 (1989) 「真性モダリティを持たない文」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店
- 林四郎 (1960 = 2013) 『基本文型の研究』ひつじ書房から復刊 (2013)
- 林四郎 (1973 = 2013) 『文の姿勢の研究』ひつじ書房から復刊 (2013)
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版

三上章（1955）『現代語法新説』くろしお出版から再版（1972）

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

宮部真由美（2017）『現代日本語の条件を表す複文の研究』晃洋書房

山内博之（2015）「話し言葉コーパスから見た文法シラバス」庵・山内編（2015）所収

Frey, Carl Benedikt & Osborne, Michael A. (2013) “The Future of Employment: How Susceptible Are Jobs to Computerisation?” Oxford Martin School.

Krashen, Stephan, D. (1985) *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Longman.